



実践的研究の発表からみた 日本の園芸療法の現状と課題

Present Status and Issues of Horticultural Therapy Observed through
Articles on Practical Research in Japan

要 約

園芸療法に関する実践的研究発表から日本の園芸療法の現状を探った。発表は90年代末から増加傾向にある。対象は高齢者が多い。筆頭発表者の所属は医療、農・園芸分野が多い。まだ異分野間の連携研究は少ない。園芸療法の定着に向けて、研究者や研究成果の情報収集・発信、異分野間の連携強化、園芸療法士の教育レベル向上と研究参加奨励、園芸療法理論の体系化などが必要であろう。

研 究 者

豊田正博、池田尚弘

■ 目 的

日本では1990年代から園芸療法に対する関心が急速に高まり、その後10数年を経るなかで、いくつかの園芸療法の試行にとどまらず、教育システムや資格認定システムが作られてきた。園芸療法は定着しつつあるように見える。ところが、園芸療法の現場を訪れてみると、園芸療法がどれほどの成果を期待できるものか具体的裏づけとなる情報を必ずしも十分得ているとはいえず、何が今日の園芸療法の課題であるかを把握できていない。

本研究では、園芸療法の実践に関する研究発表に着目し、発表件数の推移、対象者、発表者などから、園芸療法の現状と課題を明らかにした。

■ 方 法

園芸療法あるいは園芸の療法的活用が実践され、対象者の変化について具体的記載のある発表を対象。調査メディア：1) 学会関係誌；人間・植物関係学会，日本作業療法学会，園芸学会の学会雑誌等，2) 書籍，3) インターネット

■ 結果と考察

3-1) 発表件数の推移

実践に関する発表は、年により増減変動はあるが、'98年以降'05年まで増加傾向にあり、研究への関心は高まっている（第1図）。

3-2) 対象者

実践研究発表は、高齢者を対象としたものが多く（58%）、精神障害（16%）や知的障害（18%）対象の発表は少ない。

3-3) 筆頭発表者の所属分野

園芸療法の実践研究は、主に医療系、農・園芸系の所属者により行われてきた。

3-4) 医療、農・園芸、福祉系などの連携

園芸療法は学際領域であるといわれるが、実際は農・園芸系と福祉系との連携は比較的多いが、医療系と福祉系、医療系と農・園芸系の連携は少ない。しかし、連携の合計件数は2003年以降増加。研究における連携の重要性が理解されてきたためであろう（第2図）。

3-5) 園芸療法士の連携

園芸療法士関わった発表は5件であった。園芸療法士自体が少数であること、養成された園芸療法士が臨床現場に入り日が浅いことなどが関係しているであろう。



■まとめ

日本の園芸療法は、1)発表が増加しつつあるが研究成果に関する情報が少ない、2)異分野間の連携が少なく専門的立場からの考察が十分でない可能性がある、3)研究発表者は医療関係者や農・園芸系大学関係者が中心で主流となるべき園芸療法士が少ない、という現状である。

1)研究情報の収集機関や、成果情報を共有する場や成果の発信、2)園芸療法実践者や研究者の情報データベースなどを利用した連携推進、3)園芸療法士養成機関における臨床現場で活躍できるだけのカリキュラムの確立、現場に就いた園芸療法士に対する発表奨励や研究発表に向けた具体的指導、などが今後の課題となろう。

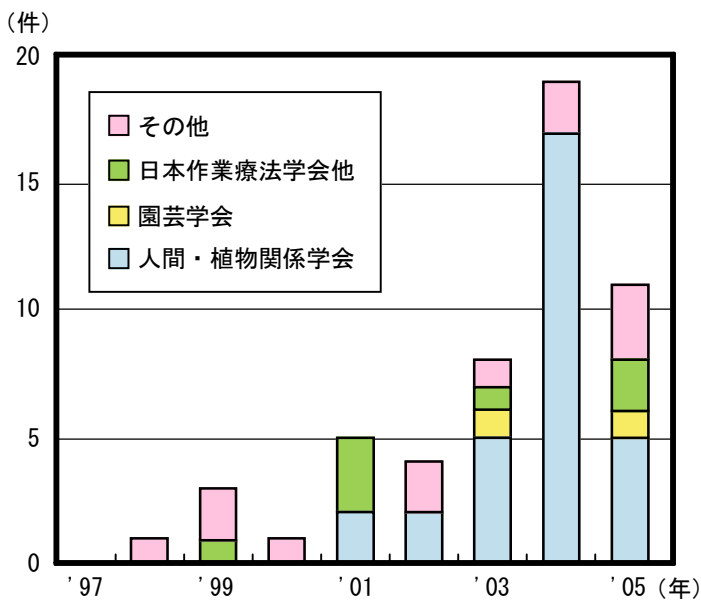


図-1 実践研究発表件数の推移。

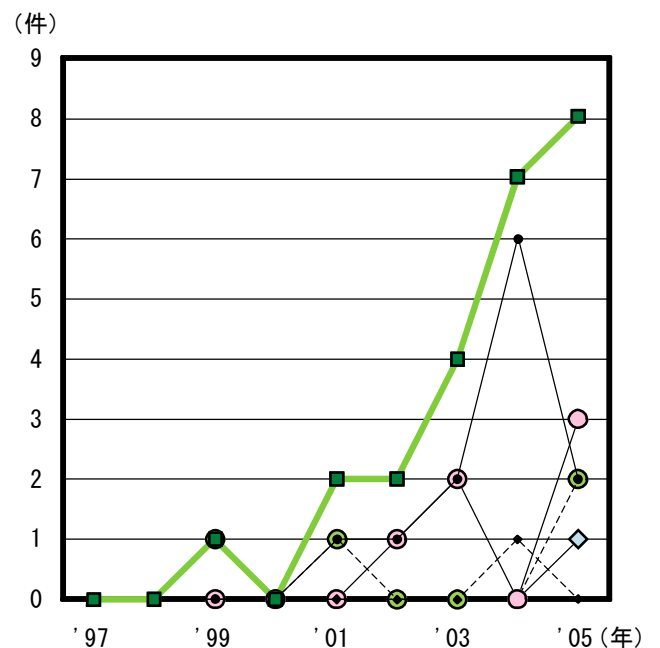


図-2 実践研究発表からみた医療、農・園芸、福祉、園芸療法の連携件数の推移。